滴一滴

阪神大震災を伝えたモスクワのアナウンサーの言葉を思い出す。「日本は何度も助けてくれた。今度は私たちがお返しをする番だ」▼実際ロシアは震災発生の日、緊急援助隊派遣を申し入れ、一週間後に毛布や防寒具を送ってくれた。サハリン地震に「さあ日本の番」との空気が広がったのも当然だったろう。貸し借りといった狭いものではなく、現地の惨状は人道的救援を訴えているようでもあった▼政府も緊急援助隊の準備を整え、現地へ支援物資を送っている。そのさなかにエリツィンロシア大統領の耳を疑うような発言が飛び込んできた。外国の支援に「後になって援助したことを利用しようとする国が出てくる。日本人は（北方領土の）島を要求してくるかもしれない」と述べたのだ▼国内向けの発言とはいえ、あまりの狭量ぶりに言葉もない。ロシア外務省も単なる失言とはせず、日本への不信感を確認したという。助け合いの精神に冷水を浴びせかけるような不快感が残る。がれきの下でいまも救助を待つ生存者を考えても、軽率過ぎる発言だろう▼阪神大震災の外国からの支援は、地球上の隣人意識の大切さを教えてくれた。民間の活動は国家的思惑を乗り越えることも。サハリンへも民間の善意は動いた。岡山市に本部を置くアジア医師連絡協議会（AMDA）は、いち早く医師団を送った▼二日には岡山空港から第二陣が出発している。民間の善意は国境を超えて広がっていく。エリツィン発言がますます卑小に思えてくる。